

ペルリ來
航の目的

千八百五十三年、我が嘉永六年六月、北米合衆國水師提督ペルリが日本訪問の目的は、彼れが本國の海軍卿に提出せる意見書に徴すれば、果してその目的の那邊に存せしかを窺ひ得るであらう。彼れの意見書の一節に曰く「第一に着手すべきは、日本に於て我が米國船舶の爲めに補給及び避泊に必要な港灣を獲るに在り。日本若し之れを肯ぜず、武力と流血を要するにせば、先づ之れに對して日本南方諸島に一二の根據地を占むるを要す。云々」と又「米國は此の機を逸せず、十分なる寄港地を獲得せんが爲めに、斷然、強壓手段を

一〇 普通選舉と建國の精神 (上)

執らざるべからず、好機再び來らず、瞬刻を争ふ。云々」(古城氏譯)かゝる野心を包藏し、堂々と押し寄せて來たのである。表面は好言令色盛んに外交的辭令を弄するも、彼の眞意斯くの如くなるを以て幕府の驚愕一方ならず、從來、絶對的專斷主義の幕府も其の處理に窮し遂に老中阿部正弘をして、諸大名に米國の國書を示し「實に國家の御一大事に候間、右書翰の趣意篤と銘心底不殘見込之趣十分に可致申聞候事」と、大名の意見を徴せしめた。

大政奉還

今や方に、幕府三百年來の獨斷專行の傳統的政治は破られ、諸大名が幕政に容喙するの端緒が開かれた。爾來、文久三年には京都に薩州、會津兩藩の連合が出來、九州には福岡、熊本、佐賀、久留米諸藩の「九州申合」が出來、七卿落後には宇和島、鹿兒島、福井、越前、土佐、久留米、福岡、熊本等の諸藩と、一ツ橋中納言慶喜及

び京都守護職松平容保との間に、二條會議成立し、幕府の長州征伐失敗後には、鹿兒島、山口兩藩の連合出來、慶應三年に至り諸大名は公然幕政に參與するに至つた。最早、幕府は諸大名の賛同なくしては大政を行ふ能はず、加之、浪人次第に擡頭し來りて、牢固として抜くべからざる大勢力となり、盛んに國政に喙を容れ、京都に於ける公卿方も亦國政に參與することゝなつた。かくて、獨り御山の大将を極め込んでゐた幕府も、自分のみを以てしては、到底ヘルリ渡來以後の内治外交を處理する能はざる事を覺り、慶喜は斷然大政奉還を決意し、慶應三年十月十四日、次の上奏文を捧呈するに至つた。

慶喜の上
奏文

臣慶喜謹て皇國時運の沿革を考へ候に、昔し王綱紐を解きて朝臣權を執り、保平之亂、政權武門に移つてより祖宗に至り、更に寵

眷を蒙り、二百餘年子孫相受、臣其職を奉すと雖も、政刑當を失ふ事不少、今日之形勢に至り候も、畢竟薄徳之所致、不堪慚懼候況や、當今外國之交際日に盛なるにより愈々朝權一途に出不申候而者、綱紀難立候間、從來之舊習を改め、政權を朝廷に奉歸、廣く天下之公議を盡し、聖斷を仰ぎ同心協力共に皇國を保護仕候得ば、必ず海外萬國と可並立候、臣慶喜國家に所盡、是に不過と奉存候。乍去猶見込之儀も有之候者可申聞旨、諸候へ相達置候、依之此段謹而奏聞仕候。以上

天下の公
議を盡す

右の奏文中「從來之舊習を改め政權を朝廷に奉歸、廣く天下の公議を盡し、聖斷を仰ぎ同心協力共に皇國を保護仕候得ば、必ず海外萬國と可並立候。」と云へるは、大いに注目に値する處である。從來の封建政治を廢し、王政を確立し、廣く天下の公議を盡すにあらざ

れば、到底外國と對抗し此の國を保護維持し難きことを表明したのである。

徳川幕府倒れて明治維新となり、明治大帝陛下は御即位、直ちに五個條の御誓文に於て、

廣く會議を興し萬機公論に決すべし

との御宣言をなされた。此の案文には「列侯會議を興し萬機公論に決すべし」とあつたのを「列侯會議を興し」の一句を削除し、單に「廣く會議を興し」と訂正せられ、一般民衆の會議を要望せさせ給ふたと洩れ承る。國家總動員の力によつて此の國を擁護發達せしめんとされた聖慮は、推し奉るだに畏き極みである。

此の五個條の御誓文は、明治元年三月十四日、明治大帝陛下親しく紫宸殿に出御遊ばされ、親王、公卿及び諸侯を率ゐて天神地祇を

祀り、統治の根本方針として、御公布になつたのである。尙ほ同時に勅語を賜り

明治維新
の勅語と
御宸翰

我國未曾有の變革を爲さんとし、朕自ら以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め、萬民保全の道を立てんとす。衆亦此旨趣に基き、協心努力せよ

と仰せられ、更に御宸翰を賜り

朕幼弱を以て倅に大統を紹き、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪へざるなり 云々

今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其所を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事朕自身骨を勞し、心志を苦しめ、艱難に立ち 云々

と宣ひ給ひ、明治維新の根本精神、施政の大方針を確立遊ばされ

た。爾來、王道坦々として發揚し、明治八年立憲政治の詔勅、次で國會開設の勅諭、憲法發布の勅語を賜り、皇室を中心とし、國民を本とする君民同治の國體巖の如く確立したのである。

一一 普通選挙と建國の精神 (下)

大化の改新

日本歴史に於て、劃時代的大革新として、明治維新に比肩すべきものは、大化の革新である。大化の革新は千三百年前、孝徳天皇の朝に斷行せられたもので、其の根本精神は實に聖徳太子十七ヶ條の憲法より出てゐるのである。當時は、恰も徳川幕府時代の如く、氏族專制で、謂はゞ一種の封建制度であつた。氏族即ち諸侯は土地と人民を私有し、政治上、社會上、經濟上に特殊の地位を占め、眼中氏族あつて皇室なく、天皇の御稜威は直接其の土地人民に及ばなかつた。此の氏族專制を根本的に改革し、封建制度を破壊して、一種

の郡縣制度を建設し、普天の下、率土の濱、王土王民にあらざるはなしといふ理想的統一を實現せんとしたのが、此の憲法十七ヶ條の大精神である。五十年後に孝德天皇の大化の改新と爲り、從來氏族兼併の土地、私有の部民は、凡て國家に沒收せられて、國民一様に租税を負擔せしめ、賦役を命じ、司法の統一を行ひ政治の公平を期したのである。這は恰も明治維新に於ける、諸侯の土地奉還と相近きもので、實に大化の改新と明治の維新とは、日本歴史上の二大改革といふべきである。此の根本精神となつた太子の憲法第十七條には

大事は獨り斷ずべからず、必ず衆と宜しく論ずべし、小事は是れ輕し、必ずしも衆と與にすべからず、唯、大事を論ずるに違ひては、若くは失あらんを疑ふ、故に衆と相辨ずれば、辭則理を得ん。

聖德太子
の憲法

普通選舉
の根本精
神

ごある。茫々千三百年を隔てて、我が明治大帝陛下は五個條の御誓文に「廣く會議を興し萬機公論に決すべし」と宣はれた。靈犀相通じ氣脈全く同じ。深く我が皇室の傳統の大精神を味解せねばならぬではないか。是れぞ眞に我が國政の根本精神であつて、また、普通選舉の根本精神である。

我か皇室が、常に民と俱に在らせらるゝことをいかに要望せられてゐらるゝかは、更に遠く神代に遡りて考察せば、愈々此の大御心の程が分明するのである。古事記の記載する處によれば、天照大御神が素盞鳴命の亂暴を畏れ、天の岩屋に入り堅く戸を閉して御籠りになつた時、八百萬の神々は、天安河原に、神集ひて、評議された又素盞鳴命を天上より放逐するに當つて、天照大御神は親しく八百萬神と共に、評議に與られた。一國の大事を決するに當りて、八百

神代の神
集ひ

萬神即ち天孫民族全體の合議に據られたることは、實に神代に於ける慣例であつたのである。八百萬神とは何ぞ、是れぞ我等臣民の祖先にして、我等の祖先は天照大御神の御前に集ひて、親しく政治に參與評定したのである。今日謂ふ所の普通選挙の根柢は正に是れ遠く神代より承け継ぎ承け継ぎ來れる處の大和民族の大精神であつたのである。

國民全體を政治に參與せしめ、皇室を中心に萬民一體となり、君民同治の政治を行ふは、遠き神代より今日に至るまで、我が國の理想とする處にして、之れを臣民より仰ぎ奉る時は君主々義となり、君の臣民に臨ませ給ふには常に民本主義を以てす。臣は君を尊みて現神人とし君は民を讃へて大御寶と稱へ、上下親和し、敬愛するの思想は、過去現在未來を通じて日本人の血となり肉となつて居る。

現八神と大御寶

是れ日本の國本にして、政治の基本たるのである。偶々、日本歴史上に閥族政治、武門政治、封建政治の現はれし事あるは、恰も一抹の妖雲天の一角を掩ひたるご等しく、之れを以て我が國政治の根本精神を斷すべきではない。君民同治の根本精神一度現はるれば、則ち大風一過して復た片雲を止めざるが如く、今や、君民の間を遮る何者もなく、日本國の大理想は毫も古に變らず燦として光り輝いてゐるのである。

代議制とは、幾千萬同胞の意志をして、國政上統治上に遺憾なく貫徹せしめんが爲めに、有爲有能の士を國民の手によつて選り擧げ以て國民に代つて國政に參與せしむるの制度であつて、苟も一人前の日本人たる以上は、何人ご雖も此の權利を行使するを妨げない。是れが今日の普通選挙の原理である。従つて、女子も亦男子ご同じ

代議制

女子参政

諸外國の
女子参政

く、選挙権を行使し得るの時期到来すべきは、信じて疑はざる處である。夫れ、一旦緩急あれば國民は擧げて義勇公に奉じ、男子戦陣に立つ時、女子はこれが後顧の憂なからしむ。忠君愛國の感激に男女の別なきに、女子のみ單り國政に冷淡にて可なりとの理由はない當然、女子参政の時期は遠からずして實現するであらう。英國にては千九百十八年、年齢三十歳以上の女子に選挙権を與へ以て婦人の参政を認め、米國にては千九百二十年、選挙権に限り男女の區別なしこの國法出て、以來、各州共に婦人に参政権を與へ獨逸にては千九百十八年以來婦人参政権の行使を實行し、露國にては最も極端にして、十八歳以上の女子は凡て参政権を有してゐる。かくの如く、今や世界の大勢は男子のみの普通選挙の域を突破して、女子にまで及ぼして居る。世界三大強國の一と稱せらるゝ日本のみ大勢に逆ひ

得るや日本の女子参政権の認めらるゝも、蓋し遠き將來ではあるまい、斯くて、國民総掛りとなり、國事國政に參與し、建國の大精神を發揮し、日本民族の大理想を實現せねばならないのである。

一二 我が建國の理想

忠君愛國の本義

三十年前
の學生と
今日と學
生

今より凡そ三十年前、著者が猶ほ中學校に學べる頃を回想し、今日の青年學生と思ひ合すれば、感慨轉た無量なるものがある。所謂弊衣破帽にして、國家を思ふの觀念強く『忠君愛國』の言葉を聞いてすら、襟を正うして感激の念に満たさるゝといふが、當時の學生の氣風であつた。勿論、今日の青年學生とて、之れに優ることも劣らざる氣概あるものもあらんかなれど、概して、意氣振はず感激の念薄らぎ、氣宇小にして自己一身の事に齷齪とし、忠君愛國の念漸次稀薄となれりと、一般より觀られてゐる。若し、果して然らば、這

日本の發
展伸張

は由々しき問題である。

余は今日の青年學生を目して、必ずしも氣力衰へ感激の念薄らげりとは思惟するものではない。時代は推移した。三十年前と今日とは、日本の世界に於ける地位も亦甚しく異つてゐる。明治の初代まで、その存在すら世界に認められざりし日本が、須臾にして世界八大強國の一となり、更に五大強國の一となり、今や、英、米と雁行して三大強國の一として、世界の活舞臺に雄躍しつゝあるのである。當時の青年學生が弱小日本のために悲憤慷慨し、忠君愛國の念に燃えたるは、今日の青年學生が世界三大強國の日本を背景として、忠君愛國の觀念とは、自から徑庭あるを免れざるは已むを得ざる事である。今や單に迷信的、器械的に忠君愛國を説くも以前の如くには耳裡に入り難い。更に深く、より大なる立場に於て、我が建國の

理想に遡り、大和民族の大使命を究盡し、以て忠君愛國の本義を闡明せざれば、眞の感激は湧き難いのである。忠君愛國は單なる概念や理論にあらず、その背景を爲すものは我が三千年來の歴史でありこの歴史の裡にこそ、日本の使命、建國の理想は織り込まれてゐるのである。これを究め、茲より躍動する處の忠君愛國こそ、眞に新日本國民をして感激せしむるものである。然らば、日本建國の大理想、大使命とは何ぞや。

幕末維新

幕末浦賀灣頭の砲聲に、鎖國の長夢は破られて、歐米の銳鋒遠く我が邊海に延び來るの時、最早將軍や大名や、少數の特殊階級の力を以てしては、到底日本を支ふる能はず、舉國一致、國民全體の力に俟たざる可からずとし、茲に國家統一の氣運起り、同時に大和民族の理想、建國の大精神てふ根本問題に突き當つたのである。此の

時即ち維新の第一年に當り、日本の大理想大使命を喝破せられのたが實に明治大帝の五個條の御誓文である。御誓文中

天地の公道に基くべし

この御宣言は、言下に建國の大精神、大和民族の大目的を斷定せられたるもので、明治維新は實に皇室を中心として、君民協力して天地公道の實現を計つたものに外ならぬ。然らば天地の公道とは抑も何ぞ。

天地の公道を究むるには、遠く我が國神代に遡り、我等の祖先が踐み來れる蹟を尋ねなくてはならぬ。神代には歴史的事實でない部分もあらう。然し、それは我等の祖先が抱ける思想、抱持せる信念、精神夫れ自身、生命夫れ自身であるが故に、我が日本の根本精神を知らんごせば、必ずや神代に遡りて之れを究めねばならぬ。

我が祖先の大理想

於是天神諸の命以ちて、伊邪那岐命、伊邪那美命二柱の神に、
 「是の漂へる國を修理り固め成せ」と詔ちて、天沼矛を賜ひて
 言依ざし賜ひき。(古事記)

我が建國の大使命！それは天神より伊邪那岐、伊邪那美の二神に
 下されたのである。茲に於て、二神は國土を生み、國土の主宰者た
 る天照大御神を生み給ふた。天照大御神は

光華明彩しくまして、六合の内に照り徹らせり。(日本書紀)

と讚へある如く、崇高秀麗の御人格に在したので、伊邪那岐命は
 殊の外の御喜びで、御頻珠の玉の緒を取りて、天照大御神に賜ひ

「汝が命は高天原を知らせ。」(古事記)

この詔を給ふた。斯くて國土經營全く成りし後、天照大御神は天
 孫瓊瓊杵尊を降臨させ給ふて、三種神器を授けられて詔を賜はつ

神勅

た。即ち

葦原千五百秋之瑞穂國は吾が子孫のしらすべき地なり、爾皇孫
 ゆきて治ろしめせ。寶祚の隆、天壤と與に窮り無けん。(日本書紀)

と。この神勅こそは、我が建國の大理想を宣へ給ひたるもので、
 神國の依つて立つべき根本義を確立されたものである。學者は、此
 の神勅を三段に分ちて解説をなしてゐるが、それに依れば

吾が子孫のしらすべき地なり

とは、我が日本の統治者は天孫即ち皇統たるべきことを確定せら
 れたるものにして、第二段の

治ろしめせ

とは、天地の公道を執り、仁政を民に施すこと、即ち王者の政治
 を行ふべきことを定められ、かくて

天壤と與に窮り無けん

こは、皇位の未來永久、萬世一系たることを豫定せられたるものである。即ち、我が國の統治者は皇孫たるべきものにして、皇孫は王者の政を行ひ、仁政を施し、斯くて寶祚は天壤と與に無窮なることを明らかにせられたのである。爾來、二千五百餘年の間、我が日本は此の大精神、大理想に基き、無限に存續し無限に發展して、今日に至つたのである。帝國憲法第一條の「萬世一系の天皇」又教育勅語の「天壤無窮の皇運」は、正に此の神勅を言ひ現はせるものにして、天祖の神勅は萬代不易、炳乎として我が國體の崇嚴にして侵す可からざることを宣べられて居るのである。

此の神勅の大精神は、更に神代の太初に遡りて、其の源を發してゐる。即ち

天地太初

神世五代

天地の初發の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は、並獨神成り坐して、身を隠したまひき。次に國稚く、浮脂の如くして海月なす漂へる時に、葦牙の如萌え騰る物に因りて、成りませる神の名は、宇麻志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。此の二柱の神も獨神成り坐して、身を隠したまひき。

上の件五柱の神は別天神

次に成りませる神の名は國之常立神、次に豐雲野神。此の二柱の神も獨神成り坐して、身を隠したまひき。次に成りませる神の名は宇比地邇神、次に妹須比智邇神、次に角杵神、次に妹活杵神、次に意富斗能地神、次に妹大斗乃辨神、次に淤母陀琉神、次に妹阿夜訶志古泥神、次に伊邪那岐神、次に妹伊邪那美

神世七代

綿たる皇室を中軸として、君民同一體となりて今日に至つたものである。

天地の公道

斯くの如く、我が建國は天地創造の絶對神、天之御中主神より發し、絶對至上の眞理即ち天地の公道に則りて治らしめ來り、君民は相扶け相擁きて兩者不二一體となり、民は君を現人神と敬ひ、君は民を大御寶と愛しみ、和み勵みて一路建國の大業、理想の實現を計り來つたのである。「萬世一系」「皇統連綿」とは、尊き御血統の連綿たることの外に、此の大使命と大理想とを受け継ぎ受け継ぎて未來永劫に易ることなき精神的方面あることを忘れてならぬ。天地生え拔きの公明なる公道に則ればこそ、我が國は若杉の如く轟々として生長發展し、あらゆるものを我れに包容し、盡く之れを我れ等の大理想の裡に鎔入して、其處に些の矛盾撞着を來さざる事、恰も日

大包容力
大發展力

月星雲の運行其の軌を過たざるが如くに圓滑である。之れを精神界に就て見るに、支那より儒教渡來すれば、之れを包容して我れ自身のものご化し、印度より佛教傳來すれば、之れを我れ自身の裡に生長發達せしめ、基督教來れば之れをも併せて、彼此長短相補ひて融合調和せしめ、今や、世界の大宗教は擧げて我が國に於て其の精華を發揮し、反つてその發生したる土地に於いては衰へつゝあるのである。又、之れを世界の大勢上より見るに、今や十二億の有色人種は、亞弗利加に亞細亞に亞米利加に、世界到る處に於て白人種のために蹂躪征服されつゝあるに、獨り我が日本は彼等の文明を我れに取り容れて完全に我れのものごし、怒濤に激する巨岩の如く、斬然として頭角を現はして、白色人種に拮抗して一步も譲らず、世界有色人種のために萬丈の氣を吐きつゝある。此の大包容力と此の大發

展力は全く我が建國の大理想、天地公道に則れる處の特殊性の發露にして、此の特殊性こそ過現未に互りて無限に發展伸張する偉大なる力である。

太初より以來、我れ等の祖先が上下一致、力を協せて建國の大理想實現のために奮闘し來れる跡をたづね、而して現在我が日本が世界に於て如何なる地位を占めつゝ、將來如何に進展すべきかを考へ合はする時、吾人は胸の底より湧き出づる感激を禁ずることが出來ぬ。これぞ實に我等の忠君愛國の至誠である。萬世一系の皇位を讚仰敬愛しつゝ、我が建國の大理想を世界に及ぼすことの、如何に晴れやかにして輝やかしきことぞ。

眞の感激
忠君愛國

一三 青年子女交際の途

戀愛問題

近時の雜誌、殊に婦女子に讀まるゝ雜誌の記事を一瞥するに、其の主要の記事にして戀愛に關せざるは殆んど稀れで、しかも、内容益々露骨となり、愈々深刻を加ふるの傾向である。今より十年前、斯かる記事を掲載せんか、風俗を紊亂するの廉を以つて、忽ち發賣禁止となるべきものも、今は公然刊行されて、世人亦之れを咎めざる有様である。心あるもの誰か擧蹙せざる。就中、妙齡の婦女子を有する親に取りては……。勿論、これ等の戀愛記事中には、到底共鳴するを得ざる低級野卑なるものもあれど、其の總てを擯斥する能

結婚風習の推移

はざる現在の時勢粧、悪風潮を何如にすべき。深く察せねばならぬい。

先づ、結婚の風習に就いて見るに、時代と共に變化し來り、當初野蠻未開の時代に在りては掠奪結婚行はれ、娶らんとする婦人あれば、之れを多數の力を藉りて強奪し來りて妻としたるものなるが、次第に人智開けるに従ひ、如何に未開時代と雖も、己が妻たるべきものを掠奪するが如きは、獸類に等しき所業なりと自覺するに至りて、賣買結婚に推移し、婦人を一個の物品視し、高い安いの相場を附け、折合つた値段にて賣買するに至つたのである。掠奪結婚といひ賣買結婚といひ、共に野蠻時代の風習ではあるが、今日猶ほ遺風の存するものがある。彼の新婚旅行の如きは正に掠奪結婚の遺風にして、結納の取交せは實に賣買結婚の習慣の遺れるもの、殊にその金

現代の結婚風習

品の多寡を云々する如きは、最も露骨なる現れといふべきである。而して、今日の結婚風習は之れを二様に分ちて考へねばならぬ所がある。即ち其の一は、從來日本に在りては、當事者たる男女の兩親又は親戚の間に於て取り極められ、當人同志は結婚の當日に至るまで互の顔をすら知らず、唯、兩親乃至媒介者の爲す所に委してゐたものである。這は當人同志の結婚といはんよりは、寧ろ家と家又は親と親との結婚にして、其の形式方法に於いてこそ差異あれ、當事者の人格を顧みず、少くとも重要視せざる點に於いて、彼の野蠻未開時代の掠奪乃至賣買結婚と何等擇ぶ處がない。然るに、近時の青年子女は大いに自我に目覺めて、結婚せんとする男女相互の人格、學識、品性、特に相互の理解に就いて重んずるに至れる結果、自由結婚即ち戀愛結婚を期待するの傾向となつて來たのである。結婚以

自由結婚

時代の推移

前に於いて男女が接近すること、特にそれが戀愛の形にまで進むが如き事は、從來一種の罪惡視せられ、少くとも教養ある青年男女、良家の子女の爲すべからざる事とされてゐた。従つて品行方正の子女、模範的の青年學生は全然此の智識に缺けてゐたのである。しかも、時勢は自由結婚を以て理想的の結婚となすの傾向に進んで來た。これ近時、婦女子の讀む雜誌に、此の種の記事が盛んに掲載され、亦、盛んに歡迎さるゝ所以である。即ち、今や日本の結婚風習は從來の因襲的結婚より自由結婚へ進み出でんとする過程にある。恰も普通選舉が實施され、陪審制度の實現目前に迫るに及んで、男女中等學校に於いて、公民教育の必要を叫び出し、數年前迄は中等學校の教師は政治演説を聞くすら不可と爲せるものが、一變して公民教育を盛んにせよと、飛び立つやうに叫び出されると好一對で、戀愛

自由結婚の危険

問題も俄に喧しく叫ばるゝに至つたのである。

過渡期の結婚方法

余は今日の社會進歩の程度乃至一般家庭の實情よりして、實行論としての自由結婚に、遽かに賛意を表し得るものでない。特に、現時の青年男女は戀愛に對する冷靜なる判斷、結婚に關する正確なる智識、性に關する正しき見解等につき、殆んど不用意であり、其處に自由結婚、戀愛結婚の危険が潜在してゐるのである。さりさて、従前の如く兩親若くは親戚の選定するがまゝに一任して顧みざるを宜しとする者でも、勿論ない。然らば、斯る過渡期に於ける結婚に就いては、如何に處するを是とするやといふに、親兄弟若しくは親戚の選定に對し、當事者たる男女は其の相手に對して調査考察するの自由を與へ、少くとも結婚前に或る程度の交際と調和を計りたいと思ふ。斯くて結婚の決定權は之れを當事者の意見に従はせたいと

男子選定
上の注意

思ふのである。即ち、當事者の一方が其の結婚を欲せざる時は、親の都合で強制するが如きは不可である。況んや、相手方の財産とか家柄とかに眼を晦まし、人格、品性、學識等を顧みず、本人の意志を壓迫してまで、之れを強ひるが如きは、斷じて避けねばならぬ。

茲に於いて、余は特に女子に對して男子選定方法につき、その一端を述べて見たいと思ふ。近時、家庭に於いて、社會に於いて、官廳會社等に於いて、女子が男子と接近會談の機會が多くなつて來たが、その會談交際中、男子に於いて次第／＼に眞面目になり、學問的になり、高尚になり、向上的になり、其の間何等卑猥、劣惡の點が見えねば、其の男子は間違のない人物である。斯くの如き男子とは、相當交際するも差支ないこと、信ずる。之れと反對に、會談中に稍もすれば不眞面目になり、卑猥に傾き、低級に陥るが如きことあら

女子の見
識

ば、則ち絶対に交際してはならない。斷然之れを避けねばならない。話頭は人生を語るといふ。一言二言、語を交ふれば、凡そ其の人物の何如なるものを判別することが出来るものである。平素讀む書物、抱く思想、語る談話、好む趣味、皆其の人の人格品性を作るが故に、一言二言交ゆる中に、皆これが閃めき出でて、たごへ多くを語らずとも、其の眼光、口吻、態度、風格によつて、その人の品性、人格を察知することが出来る。孔子は「其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞ瘦さんや、人焉んぞ瘦さんや」と云はれたが、正に至言である。人の心事、性行、品性は、到底包み藏す能はざるものである。宜しく今後の女子は男子に對し斯程の觀察力を有すべきである。是は必ずしも男子を疑ふにはあらずして、女子の女子たる見識である。

以上の記述は、學校卒業の後、身を處する上の參考として述べたものである。在學中、女生徒が男生徒と交際するが如きことは、少くとも中等學校にあつては勿論、慎まねばならぬ事である。

一四 感 激

青春期の
一大轉機

人格の優れたる偉人の傳記を繙く時、共通して吾人の胸に轟々ど迫るものあるは、夫れ等の偉人が皆青春時代に、精神上一大轉機を爲し、眠れる精神は一朝にして覺め、卑猥の心は俄に躍り、此れを境界線として、急轉直下人格擴大し品性高調せるを觀る。

南洲の感
激

彼の西郷南洲は、元より大人格者にして、造物主の傑作とも云ふべき程であるが、彼にも亦青春時代に一大轉機に際會してゐることを見逃すことは出来ない。南洲二十三歳の時、正義派の赤山靱負が其の正義の謀破れて自裁せんとするや、平素其の前途を矚目して、

愛し居りし南洲を膝下に招き、具に薩摩藩中の俗論黨の陰謀を指摘し、將來の自重を訓戒し且つ遺言し、其の臨終に着用せる血痕斑々たる肌着を南洲に贈つた。靱負が熱誠を籠めたる訓戒は、南洲の心根に徹して其の精神を燃やしたに相違ない。殊に殘燈の下に恩師の血痕淋漓たる形見の肌着を延べ、最後の訓戒を想起する時、満身の血は湧き返り、他日必ず棟梁の材となり、藩主の爲め國君の爲め、その一身を捧げんと誓つたに相違ない。實に、南洲の人格は、此の時に一大轉機を爲し、言語動作の末に至る迄、趣を異にするに至つたといふことである。之れを一言にして盡せば、感激の賜である。

感激の賜

互の交りに於て感激ほど尊いものはない。先輩の尊むべき所は、畢竟、其の言動心事の後輩を感激せしむる處にある。爵位勳等の如きも人格品位の發現にあらざれば、沐猴の冠たるのみ。友人の尊む

べきは、互に感激し合ふ處にある。満々たる情氣一朝にして熱血に燃え、消滅せる意氣一躍して天を衝き、心機一轉新人の境涯に至るは、理窟でも議論でもない。唯、感激の賜に外ならぬのである。古人が境遇は人を作るごか、時勢は偉人を生むごかいふも、環境の與ふる感激を指して云ふたものに外ならぬ。朝な夕な、感激に満ち、心の駒に鞭ちて奮闘努力、孜孜として倦まざれば、品性次第に高調し、人格自から大成し、生き甲斐ある人となるであらう。

死の感激

人生、死ほど嚴肅崇嚴にして神聖なるはない。此れほど偉大なる感激を與ふるものはあるまい。況して、其れが哲人、偉人の死であるならば、愈々大なる波紋を他に及ぼすであらう。ナポレオンは「若しソクラテスが人ごして死せしものならば、キリストは神ごして死したるものである。」と驚嘆されたが、實に此の二人は世界の人類中

最も偉大なる死に方をした人である。従つて二人の死ほど偉大なる感激を與へたものも、世界に稀れである。

ソクラテスの死

ソクラテスは死刑の最後の瞬間まで、靈魂の不死、未來の生命につき攻究を續け、従容として毒杯を仰ぎ、正に眞理探究者の模範を示された。即ち自ら説ける靈魂の不死を示されたのではないか。プラトーンが二十歳の時、初めてソクラテスに學び、二十八歳の時師の死刑を目撃し、茲に絶大なる感激を受け、彼のエマーソンが評せるが如く、ソクラテスの全人格がプラトーンの人格に融合するに至つた。プラトーンの偉大は、實にソクラテスの死より受けたる感激の賜に外ならぬのである。

キリストの死

キリストの死は即ち十字架の處刑である。往昔我が國の極刑たる磔刑の場合は槍をもつて一突きに刺し殺すのであるが、キリストの

刑せられた十字架の場合は、能ふ限り永い間苦痛を與へようとする殘忍酷薄なる仕組みであつた。即ち、十字架上に手足を釘付けとしたるまゝ、放置し、鮮血淋漓、絶息するまで曝さるのである。その間或は風雨に打たれ、或は日光に照付けられ、或は獸猛に襲はれ、あらゆる苦痛を嘗め悶死するのを待つのである。キリストは實に此の十字架の極刑に處せられたのである。而して、彼れが「狐は穴あり、天空の鳥は巢あり、然れども人の子は（自己を指す）枕する所なし。」というたほど心血を濺いで愛した弟子は彼れを裏切り、友は彼れにそむき、國民擧つて彼れを罵り、天上天下、彼れの爲めに一身を挺せんとするものは一人すらなかつたのである。斯程の苦痛に苛まれつゝも、彼れキリストは自己の爲すべき義務を忘れず、救濟の事業を爲し續けたことは、實に驚嘆すべきである。彼れは彼れを十字

十字架上の
キリス

架上に釘付けにした兵卒等に對しても微塵も憤りの情を抱かず、却つて満腔の同情を注ぎ、彼等兵卒のために「父よ、彼等を赦し給へ彼等は其の爲すべき所を知らざればなり」と祈り、人生最難事とする愛敵心の範を示された。彼れは又彼と共に十字架上に釘付けされた殺人犯の一人が、悔悟の情の表はるゝを見ては「まことに我れ汝に告げん、今日汝は我れと共にパラダイスに在るべし」と慰藉された。是れ正に彼れが大理想たる傳導の繼續ではないか。斯くて今や息を引き取らんとする時、彼れの母と愛する弟子の一人が近く立てるを見て、母に「女よ視よ、汝の子なり」と、弟子に「視よ汝の母なり」と言ひて、母を弟子に托し、弟子が母の手を引き、十字架の側を立ち去るを見て、最早や此の世に残す所なしとて「我が事竟りぬ」即ち我事業成就せりと言つて安らかに息を絶たれ、孝道の絶頂

世界的感
激

感激！！
轉機！！

を示されたものである。此の間約六時間であつたといふ。

宗教上の神秘は茲に説かぬ。彼れが自己の理想實現のために、十字架上の處刑を甘受したのみならず、其の將に死なんとする間に至るまで、苦痛に堪へつゝ飽くまで愛の傳道を棄てなかつたことは正にナポレオンが云へりし如く、神として死んだものといふべきである。今日、キリストが釋迦と共に、世界文明の基調を爲してゐることは、まことに彼れの死の與ふる世界的感激の賜ではないか。

赤山靱負の切腹は西郷を生かし、ソクラテスの毒杯はプラトーンを作り、キリストの死は世界救濟となりて現はれた。死の與ふる感激の何如に大なることよ、何如に尊きことよ。現代の最大缺點は、物質、名譽、地位等にのみ捉はれて、感激性に乏しきことにある。感激の無き處、眞人間の叫びは出で來らず、人間の本性は顯現しな

い。學博きも才高きも、富大なるも位尊きも、眞人間の叫びなき處に眞の價値はない。永遠性はないのである。

青年學生諸君よ！感激こそは御身等をして眞の人間たらしむるであらう。そこに向上の一大轉機あることを銘記せよ。

一五 白隱和尚と使徒パウロ (上)

法華眞の
面目

白隱和尚の遠羅天釜は、余の愛讀の書である。其の中に

「人あり一切諸經論を熟讀せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。無量の寶塔を修造せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。百千の佛を造立せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。三界の祕密を學得せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。彼の黃卷赤軸のみを把えて、法華經なりと偏執せんよりは、須らく眞の法華を一見すべし。口に百千萬部の法華經を讀誦せんよりは、須らく眼に一回眞の法華を見るべし。是れ實に、成實不壞の高談なり。如何に

して法華眞の面目を徹見すべきぞならば、先づ須らく大疑團を起すべし。何物を指してか法華眞の面目とはするぞ。自己本有の妙法の一心也と聞くからに、自心を見るにしかず。自心とは如何なるものぞ、白き物とやせん、赤き物とやせん、是非々々一回見得すべきぞ、猛く甲斐々々しき志を震つて大誓願を起して晝夜に究め見るべし。自心を參究するに、行持は様々多き中に、法華經の行者ならば、法華經に超えたる事や侍るべき。法華三昧の行持とは、今日より思ひ立ちて、憂につけ、辛きにつけ、悲しきにつけ、嬉しきにつけ、寝ても覺めても、起きても居ても、只管に法華の首題を南無妙法蓮華經々々々々々々間もなく唱へらるべし。此の首題を杖にも力にもして、是非とも法華眞の面目を見届くべし、と深く望をかけて唱へらるべし。願くば出息入息を題目にしてほしき事よと、隨

純一無雜
打成一片
の眞理

分親切に間斷もなく唱へらるべし。唱へ唱へて怠らずんば、久しからずして心性たしかに大石などを淘り居えたるごとくにて、安住不動、如須彌山の心地はほのかに覺えあるべし。其の時にすて置かず隨分唱へらるべし。いつしか聞及びし正念工夫の大事に契當して、平生の心意識情すべて行はれず、金剛圈に入るが如く瑠璃瓶裏に坐するに似て、一點の計較思想なく、忽然として大死底の人と異なる事なけん、わずかに蘇息し來らば、覺えず純一無雜、打成一片の眞理現前して、立所に法華眞の面目に撞着して、忽ち身心を打失して本門壽量、久遠實成の如來は眼前に分明にして推せども去らじ。此の時に當つて天臺の法性寂然、寂而常照の寶所に投入し、眞言の阿字不生の惠日に照され、律宗の諸佛無上の金剛寶戒に冥合し、淨土の卽心往生、極樂報土の素懷を遂げ、水鳥樹林、念佛念法念僧の妙莊

嚴の目のあたり見届け、娑婆即寂光の正眼を開き、草木國土悉皆成佛の田地に至らん事、毫釐も相違あるべからず。」

と喝破してゐる。又、和尚は修養の心掛として、

眞正の得悟

「如何かして眞正の得悟は得る事ぞとならば、塵務繁絮、世事紛然七顛八倒の上に於て、譬へば勇士の大敵に取り圍まれたらん時に、匹馬單鎗、大勇猛の精神を振つて、一方を突き破つてかけ抜かんず時の心持にて、正念工夫絶えずりもなく、精彩を着け、手脚の下すべき様もなく、四面空洞として、心身ともに消え失せたる心地は時々これ有るものに侍り、此の時恐怖を生ぜず勵み進み侍れば、一旦の得力は間もなく豁然たる者に侍り、総じて參學は妄念情量と戦ひ、昏沈睡魔と戦ひ、動靜違順と戦ひ、是非憎愛と戦ひ、一切の塵境と相戦ひ、正念工夫を推し立ててもて行く張合にて、不慮の省覺

はこれ有る事に侍り。」

と仰せられた。日本禪宗中興の大師の言や、直ちに吾人の肺腑を判り、魂のごん底を貫き、否々天の中核に徹するものがあるではないか。

マーデングの「ハウ、ツー、グット、ホワット、ユウ、オント」の第一頁に、次の様な物語りがある。

迷へる子獅子

昔、一匹の子獅子が母の睡眠中に、獨り森の中に遊んでゐるうち遂いうか／＼と深入りして歸路を失つてしまつた。子獅子は聲を限り母獅子を呼びつゝ、あちらこちらと森の中を駆け廻つたが、何の應へもないので、悲しみ抜いてゐた時、其處へ子供を攫はれて捜し歩いてゐる羊が現はれた。羊は子獅子のいちらしい様子を見ることを伴ひ歸つて我が兒のやうにいたはり愛して育て上げた。月日

一大咆哮

を經るにしたがつて、子獅子は骨格いとも逞しく威風四隣を拂ふ様になつたが、然し獅子の本性を現はさず、至極温和に母羊のいふがまゝに従つてゐた。すると或る日のこと、丘の上に一匹の大きな獅子が現はれ、彼の黄褐色の立髪を振り立て、一聲高く大咆哮をした。その聲は山々峰々に物凄くも轟き渡り、眞に百獸をして畏怖せしむる底のものであつた。母羊は吃驚仰天し身の危険に瀕するを覺つて倉皇として逃げ匿れたが、不思議や彼の羊に養はれた子獅子は、その咆哮が一種靈妙なる魁力をもつて胸中に轟き渡るのを感じ、俄に希望に輝き勇氣滿ち溢れ、一大自覺を靈感して思はず一聲咆哮して彼の咆哮に應へたのであつた。此の時以來、最早母羊の許にじつとし居ることが出來ず、恩顧ある養ひの母に同情の一瞥を與へたまゝ一躍りに飛んで丘上の大獅子目指して去り、再び母羊の許へは歸つ

一大自覺

内心潜在
の本性

て來なかつた。と、(意譯)

迷兒となつて羊に育てられ、羊の如くなつてしまつた獅子が、今や獅子本來の我を發見したのである。大獅子の咆哮を聞いて初めて自己心内に眠つてゐた獅子の本性を喚起し、忽ち百獸の王たるの自覺に達したのである。若し丘上に大獅子の咆哮を聞かなかつたならば、彼れは依然として羊の生活になれ一生を弱き羊として終つてしまつたかもしれない。吾人人間には、誰れも此の眠れる獅子が潜在してゐるのである。如何にして此れを發見し喚起すべきか、是れ人生根本の大問題である。白隠和尚が

白隠和尚
の警告

「惜むべし再び得難き一生を盲龜の空容に入る如く、鬼の棺木を守るに似て、やみく／＼過ぎ了つて、苦しかりし三塗の舊里へ懲もななく立ち歸らん事、皆是進修の指南悪しく、見性本より眞ならざるが

故に、一生空しく心力を勞し盡して、遂に方寸の效を立る事能はず
寔に憐むべし。」

人生の第
一原理

ご警告されたのは、此の本性を覺得せよご教へられたのである。
人生第一の原理は、人間の人間たる所、人間の本體、人格の本質を
究め、こゝに活眼を開き、體驗を積み、人間たる本分を完全に發揮
するにあることは、萬人に施して悖らざる鐵則である。然し、一面
に於て人間は迷ひの子である。正に人間本來の面目に立ち還るべき
ものなるに、之れをこれ覺らず、あらぬ方面に迷ひ出でて苦しみを
重ねつゝある。試みに、一日東京の街頭に立ちて、世相人事を眺め
見よ。何のために汽車は走り、電車は行き交ひ、自動車は飛び、飛
行機は雲際に舞ふや。目を剥き出し、齒を喰ひしぼり、右往左往す
る雲霞の如き人群れの中には、賢愚あり、強弱あり、成功せるあれ

世相雜然

一朝灰燼

ば失敗せるあり、泣く、笑ふ、叫び、嘲る、朝に萬金を投じて豪奢
を極むる富豪あれば、夕に一飯の乏しきに兒の飢に泣く慈母もある
金殿玉樓天を摩し、物質文明燦として輝き、ソロモンの榮華も斯く
やご思はしむるものあれば、一夜の雨露をすら凌ぐに由なくて陋巷
に彷徨貧兒もある。雜然紛然たる此の世相、人間の蠢動這はそも何
者ぞ？是れをこれ大正十二年九月一日の震災は一擧にして粉碎し終
つた。否、大自然より觀る時んば、些々たる活動、天の輕微なる惡
戯のみ。しかも誇りに誇りたる物質文明は一瞬にして灰燼に歸した
思へば、斯くの如き雜然たる世相は人生の第一原理を構成するも
のではない。人には永遠不滅の靈寶がある。宇宙萬物に超越する絶
大無限の價値を本來具有する。天變地異も以つて如何とも爲す能は
ざる靈妙不可思議の力を藏する。これを發揮體得してこそ、初めて

釋迦の苦業

人間本來の面目を發揮するのである。

「釋迦が六年まで雪山に閉籠りて皮骨連立し、糸を以て瓦を編みたる如く瘦せ衰へ、蘆すゝきの膝を突き貫きて臂まで穿ち抜けたるをも覺え給はず、目のあたり雷の落ち牛馬を打ち殺したるをも御覺えましまさぬ程、苦吟し給ひて、初めて佛の知見を開き給ひたるは如何なる事ぞや。」

ご、白隠が述べられたるは、まことに人間の本性を發覺することの容易ならず、かくても尙ほ勵みて達すべきことを示されたもの以外ならぬのである。

一六 白隠和尚と使徒パウロ (下)

ステパノの死

サウロの迫害

義人ステパノが天地の大靈に満ち、迷の子等の迷夢を叱咤するや彼等の爲め遂に石にて打ち殺された。其の時彼れは何等悲しむ色もなく、恨む様子もなく、大地に跪き「主よ！この罪を彼等に負はせ給ふな」「主イエスよ！我が靈を受けたまへ」と大聲に呼はりつゝ、人道の戦士として潔き眠りに就いた。迷ひの子等の頭目サウロ（後のパウロ）は此れを見て宜しとし、其の日エルサレムにあるキリスト教徒に對し、空前の大迫害を加へ、総ての教會を荒し、信者の家々に侵入し、其の道の男女を引出して獄に投じ、猶ほ飽き足らずし

て、ダマスコにあるキリスト教徒に對し

「サウロは猶も兇言と殺氣を吐きて、主の弟子等をせめ、祭司の長に往きてダマスコの諸會堂に寄する書を求む。彼は此の道に従へる者を見れば、男女にかゝはらず捕へて、之れをエルサレムに曳かんと思へり。彼れ行きてダマスコに近けるごき、忽ち天より光ありて彼れを環り照せり。彼れ地に仆る。其の時「サウロサウロ何ゆゑ我れを迫害るや」といふ聲を聞けり。サウロ曰ひけるは「主よ爾は誰ぞ」主いひ給ひけるは「我れは汝が迫害るごころのイエスなり、爾荆ある鞭を蹴るは難し」彼れ戦き駭きて曰ひけるは「主よ我れに何を行さしめんご爲給ふや。」主彼れに曰ひけるは「起きて町に入れ、さらば爾の行すべき事を示すべし」彼れと共に往ける人々物言ふご能はずして立ち止り、其の聲を聞けごも誰れをも見ざりき。サウロ地

サウロの
改心

より起きて眼を開きたるに、何も見えざりければ、伴へる人等その手を曳きてダマスコに入りぬ。彼れ三日の間見えご又飲み食ひをも爲ざりき。(使徒行傳第九章第一節―第九節)

悟の世界

迷ひの子の頭目サウロは、その迷ひの絶頂に立ちて兇暴を逞うしたる刹那、一閃の靈光遂にサウロの迷霧を拂ひて心眼を開き、靈覺全身を浸すに至つた。是れ、キリスト教の大柱パウロの改心の刹那である。兇暴のサウロの内心にも、輝きわたる靈光の潜めることを深く思ふべきである。

此のサウロの大轉機、又、白隠の法華眞の面目は、一言にして盡せば人生の悟りである。自己の神性靈覺の發見である。人は此の境地にまで進まねばならぬ。此の靈妙世界に自在して世界を見下せば巨萬の富も尙ほ糞土の如く、榮譽人爵亦兒戯に類す。朝より夕まで

營々丹精する人間の働き、血迷へる利害休戚皆是れ水の泡の如く、榮華を極めたるソロモンだにも、其の服装は野の百合の花の一つだにも及ばざりきこの聖者の言も、まことに首肯さるゝのである。黄金、人爵、地位、名聲、學問、才藝等、皆此の神境に立ち至つて初めて價値を生ずるのである。パウロの宣べられた如くわれ等が有てる賜は

天職使命

「賜る所の恩恵によりて各々賜を異にせり、或は預言あらば信仰の量に従ひて預言をなし、或は務めあらば其の務めをなし、或は教へをなす者は其の教へを爲し、勧めをなす者は其の勧めをなし、施しを爲す者は惜みなく施し、治めを爲す者は怠らず治め、憐れみをなす者は歡びて憐れむべし」(ローマ書第十二章第六節―第九節)

此の天職を自覺し、使命を把持してこそ、初めて富は世を益し、

人を扶け、學才は世道人心に貢獻し、高位高官は文化の指導となるのである。斯くてこそ、萬物我れに於て皆宜しこの自在境に逍遙するここが出来るのである。

神性靈覺の發見

人生の第一原理は自己の神性靈覺の自覺體驗の基礎の上に、天授の使命を感得把持し、一身を捧げて勵み行ふにある。金錢財寶、人爵榮譽の如きは、此れが従の従たるべき物である。此の主従の干係は萬代不動の鐵則である。今日の學校教育は、此の點を力説高唱すること甚だ低調にはあらざるか。唯、單に修身教科書を棒讀みする程度の講義を以てしては、生徒の内心に透徹して以つて刺激を與へこの種の自覺心を起さしむることは出来ない。情氣漲りて教場は一種の催眠術の稽古場に墮し終らざるか。これ今日多くの修身授業の現狀にあらざるなきか。學校教育の最大目的、教育學、倫理學の理

想、哲學、宗教の目指す所、皆此の境地の感得體驗把持に合一するのである。余は學生をして願はくは此の自在境に到達せしめんご、人生第一原理を先づ彼等の腦裡に刻みつけんご、日夜祈つてゐるが己れ未だ甚だ足らずして、志のみあつて力の及ばざるを嘆じてゐる。さあれ、目標を此處に据え、天性の驚馬に鞭ち鞭ち、やがては生徒の魂に觸るゝ日の有るべきを思うてゐるのである。白隠和尚が

大勇猛心

「男子たる者の思ひ立ち、取りかゝりたる事を、遂げずや置くべきと思ひ定めて、如何なる飢寒をも忍び懲へ、如何なる風雨をも堪へ凌ぎ、火の底に入り、水の底に浸りても、佛祖の開き給ひたる眼を開き、佛祖の到り給へる田地に到りて、宗門の大事を參歇し、末後の奥義を徹了して、十方參立の衲子を惱害し、釘を抜き楔を奪つて以つて佛祖の深恩を報答すべしご、歷劫不退の大誓願を憤發し給は

パウロの
向上心

ゞ病何れの處にか湊泊せん。」

この大氣魄、又、使徒パウロが晩年に至りて猶

「兄弟よ、我れ自ら之れを取れりと思はず、唯、この一事を務む。

即ち後に在るものを忘れ、前に在るものを望み、神キリスト、イエスによりて上へ召し賜ふ所の褒美を得んご、標準に向ひて進むなり。」（ピリピ書第三章第十三節—第十四節）

「われら四方より患難を受くれども窮せず、詮方盡くれども望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず、われら何處へ往くにも常にイエスの死を身に負へり。此はイエスの生けることを我等の身に顯れしむるなり。」（コリント後書第四章第八節—第十節）

この無限の向上心ご不退轉の魂を持ち續け行かば、聽て光明赫灼たる靈域に到達することが出来るであらう。是れ吾人修養の士の以

て鑑ごすべき所である。

敬愛讀本終

大正十五年十二月二十日印刷
大正十五年十二月廿五日發行

敬愛讀本奥附
定價金壹圓貳拾錢

版權所有

著作
兼
發行者

長 戶 路 政 司

印刷者

千葉市寒川壺千拾五番地

千葉印刷株式會社

代表者 加藤至徳

發行所 關東學院出版部

千葉市千葉四百七拾四番地
電話 千葉 四三九番